



大西脳神経外科病院だより 第31号

ぶれいん

発行日：平成28年5月吉日

発行人：学術図書委員会

発行責任者：大西 英之

編集責任者：吉野 孝広

学会特別号！



2015年、
から我々が
得たものは！
2つの学会



NESON
NEPALESE SOCIETY OF
NEUROSURGEONS

3rd NESON
&
4th NJNC Combined Meeting
Theme:
Brain Attack: Prevention & Management





第18回日本臨床脳神経外科学会を開催して 大西脳神経外科病院 理事長・院長 大西 英之

第18回日本臨床脳神経外科学会を平成27年7月18日(土)、19日(日)の2日間、神戸で開催させて頂きましたので、ご報告申し上げます。学会開催の前日に台風11号が四国から中国地方を縦断したため交通網が分断され前日にご来神出来なかつたり、当日もJR神戸線が運休となったため、多くのご迷惑をおかけしましたが、演題数は過去最高の455演題、1290名のご参加をいただきました。あらためて御礼申し上げます。

今回学会を開催するにあたり学会のテーマを「近未来の脳神経外科のゆくえ」と致しました。現在世界の政治、経済は混沌としており、職業倫理の欠如が問題になっている事件が起こってきています。今回この学会を機に脳神経外科を取り巻く諸問題を整理し、近未来の脳神経外科学の発展につなげられたらどんなに素晴らしいかと考え計画いたしました。

文化講演では藤原正彦先生により「日本のこれから」の演題で講演していただきました。われわれ日本人が持っている精神文化を大切にしながら生きていくことの大切さを教えて頂きました。

特別公演は伊藤正治先生により日本の社会と医療のゆくえ」、高橋淳先生により「iPS細胞を用いたパーキンソン病治療にむけて」、嘉山孝正先生により「これからの医師のキャリアパス」についてご講演賜りました。それぞれが専門とする分野で含蓄のある示唆を与えて頂きました。

教育公演は近藤達也先生により「脳を守る薬と医療機器への期待」、宝金清博先生により「脳神経外科と生命・医療倫理」、小林茂昭先生により「心ある医療人を育てるには」のタイトルで大所高所から見た講演をして頂きました。脳神経外科的テーマとしては宮本亨先生により「脳神経外科医が行う脳卒中診療の近未来展望」、坂井信行先生により「脳血管内治療の近未来」、佐々木真理

先生により「臨床MRIの近未来展望」、佐谷秀行先生により「脳腫瘍の病態と未来の癌治療」、若林俊彦先生により「グリオーマ医療に未来はあるか」、村垣善治先生により「術中画像を含めた脳神経外科手術」、斉藤清先生により「頭蓋底外科手術の近未来展望」、辛正廣先生から「神経内視鏡手術の近未来展望」、飛騨一利先生から「脊髄脊椎外科の近未来展望」、松島俊夫先生により「神経血管圧迫症候群 - 診断と外科治療 -」、平孝臣先生により「脳神経機能外科の未来」、三国信啓先生により「てんかん外科 - その進化と今後の展望 -」、Basant Pant先生により「Anterior cervical discectomy with bone cement fixation」の講演をして頂きました。1冊の教科書が出来上がるほど内容の充実した講演でした。本学会の特徴は脳神経外科医、薬剤師、看護師のみならずチーム医療を担う多くのコメディカルスタッフが集いますので、看護師の方々のために田村綾子先生により「日本における脳神経看護の明日にむけて」、須藤久美子先生により「楽しく働くために～ナースのモチベーションアップの



視点から」を講演して頂きました。多くの経験に基づいた楽しく有意義なご講演でした。経営者や事務の方のために藤森研司先生により「DPCデータを用いたクリティカルパス・地域シェア分析」、矢口智子先生に「医師事務作業補助者のチーム医療における役割と経営貢献」を話していただきました。今後の病院経営にとっても参考になりました。

シンポジウムは「安全な脳神経外科手術を目指して - 基本手技とpitfall -」、「脳神経外科手術における術前シミュレーションと術中モニタリング」、「脳神経外科領域におけるチーム医療の現状と問題点」、「脳神経外科領域の放射線治療の近未来展望」、「災害と脳神経外科医療」、「脳神経外科における看護教育」、「認定看護師への期待と今後の役割」、「リハビリテーションの現状とこれから」、「これからの医療と経営」のテーマで熱心な討論が繰り広げられました。今後の臨床に役立つ内容でした。

予定した学会初日の船上懇親会は幸いにも台風一過、快晴となり楽しい記念となるパーティーをお楽しみいただけましたと思います。学会長をお引き受けするにあたりこの日本臨床脳神経外科協会理事や事務局の皆様、日本脳神経外科の多くの先生方、ご協賛頂いた多くの企業の皆様、友人知人、当院職員など多くの人々のご協力があったの事だとここに改めて厚く御礼申し上げます。

この学会を通じて、ご出席いただいた若き皆様が大いに刺激を受け、今後ご活躍されましたならば、お世話させて頂いた我々にとりましても望外の喜びであります。また、我々職員一同にとりましても今回の貴重な経験は、多くの苦労もありましたが職員間に新たな絆ができ、一致団結して目的に向かって進むということの大切さを身をもって教えてくれたと思います。そして職員それぞれの人生の思い出のページとなり、苦労以上の実り多き学会ではなかったのかと思っております。有り難うございました。



藤原 正彦 先生



高橋 淳 先生



嘉山 孝正 先生



高倉 公朋 先生



伊藤正治 先生



学会終了後にスタッフ全員で記念撮影です。一致団結の表情!!



第18回日本臨床脳神経外科学会に参加して 大西脳神経外科病院 副院長 久我 純弘



2015年7月18日（土）、19日（日）とホテルオークラ神戸で第18回日本臨床脳神経外科学会が当院の大西英之院長が会長となり開催されました。それに先立ち7月4日（土）に当院の英明

ホールで市民公開講座が催されました。テーマは「高齢化社会における脳神経疾患の最新治療」と題し、埜本勝司先生の司会で前半は脳卒中に関して大西英之院長、兒玉裕司先生、大西宏之先生が講演され、後半は吉野孝広先生、藤田賢吾先生、そして久我がそれぞれリハビリ、認知症、しびれについて講演を行いました。高齢化に伴い、多くの方が心配する脳卒中、認知症などが演題となっており、当日は満席で椅子を追加する必要がある状態でした。熱心な講演と質疑のため予定の2時間を大きく超えることとなりましたが、関心の高さが伺えました。

さて、周到な準備の上、学会が間近になりました。学会の前日の17日には会長招宴が行われます。ところが台風11号の影響で大雨となり、JRが運休となりました。そのため道路も大渋滞でしたが、ほとんどのスタッフはどうにか会場に到着でき、招待者の方もほとんど到着されましたが会長は気を揉んだことでしょうか。予定通り無事に会長招宴が行われました。

18日の学会初日もJRの混乱は続いており午前のセッションでは急遽、座長を変更したところも一部ありましたが、それ以外は順調に進行しました。私自身は参加受付、総合案内を担当していたため、学会の演題を聴講することはほと

んどできませんでしたが、どの会場も例年になく多くの参加者がいたようです。1日目の学会が終了し、夕方からは会員懇親会がルミナス神戸2で行われます。昨日とはうって変わって、素晴らしい晴天となりました。神戸港を出港し、明石海峡大橋をこえる頃には甲板上では心地よい夜風に吹かれながら夜景に映えるイルミネーションを堪能できました。上陸してからは急いで場所を変え、例年この学会の時に催されている函館脳神経外科病院との懇親会があり、両病院職員同士の親交を深めることができました。

さて、学会2日目は朝8時から当院の吉野副部長の呼吸器合併症に対する呼吸介助に関するモーニングセミナーの座長を仰せつかっておりました



熱のこもった座長でしたが、広い会場に朝早

くから非常に多くの会員が参加され熱心に講演を聴かれていました。午後は1時からネパールから招待されたPant先生の頸椎前方除圧術に関する教育講演の座長をさせていただきました。Pant先生は日本語も堪能で、日本語で講演していただけましたので、パラメディカルの方々も理解しやすかったことと思います。

滞りなく無事に2日間の学会が終了しました。各方面の第一人者の先生方による多くの特別講演が組まれていましたが、今回は会場での学会運営のため、ほとんど聴講できなかったことが残念でした。今回の学会に当たっては日頃大変忙しい中、惜しみなく協力してくださった職員の皆様、本当にご苦勞様でした。

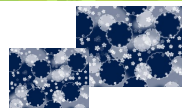


パント先生と久我副院長



学会に先駆けて7月4日に市民公開講座を開催しました。

■ 高齢化社会における脳神経疾患の最新治療 ■



第18回日本臨床脳神経外科学会・市民公開講座を通じて

～脳卒中市民啓発活動の大切さ、メッセージはact FAST～

脳血管内治療科部長 大西 宏之

平成27年7月18、19日、第18回日本臨床脳神経外科学会を当院が主催しましたが、それに先立ち7月4日に市民公開講座が開催されました。東播磨地区の市民を対象に、脳卒中について、脳卒中後のリハビリテーション、物忘れ・認知症、脊髄、脊椎疾患など一緒に勉強する機会となりました。いずれの内容も興味深い内容ばかりであったため立ち見が出るほどの大盛況でした。その中で私は最先端の脳血管内手術についてお話させていただきましたが、改めて市民の方の健康に対する関心の高さ、市民啓発の重要性について痛感致しました。

脳血管内手術は近年マスコミ等でも取り上げられることが多く、脳血管内手術で使用される器材(デバイス)が欧米を中心に様々開発され本邦にどんどん導入されており目覚ましい発展を遂げています。今回、特にホットな脳動脈瘤に対する塞栓術および脳梗塞に対する最開通療法を中心にその最先端治療を紹介しましたが、その中で脳卒中は時間との勝負(*Time is Brain*)であることも強調致しました。脳梗塞は詰まった血管を最開通するまでの時間がすべてで、欧米では“act FAST!!”としてCMが流され市民啓発もされています。



すでに救急搬送システムや院内の診療体制は高いレベルで整備されてきており、治療技術も最先端のデバイスによりかなり成績が向上しています。しかし、まだまだ患者様の予後を上させる余地が残されており、その足枷となっているのは発症から救急要請するまでの時間、つまりいかに早く脳卒中を疑って病院まで搬送するかということです。これは我々だけではどうすることもできませんので、今回“act FAST(速く)!!”をメッセージとして伝えさせていただきました。Face(顔), Arm(腕), Speech(言葉), Time(時間)に症状があればすぐに病院へという標語ですが、ちょっとは覚えていただけたのではないのでしょうか。予想以上に反響が大きく、発表後もたくさんの質問をいただきました。脳卒中予防についてや開頭手術との棲み分け、脳血管内手術の医療費などいずれも具体的で的を得た質問ばかりで関心の高さを実感致しました。

今回は153名とごく限られた方のみでしたので、これからもこのような活動を通じて、市民の方と一体になって脳卒中を克服できるよう尽力していきたいと考えています。

多くの市民の方々に来場して頂き盛況のうちに市民公開講座が終了しました

日本臨床脳神経外科学会並びに ネパール-日本脳神経外科学会に携わって



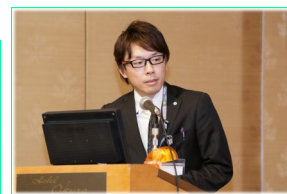
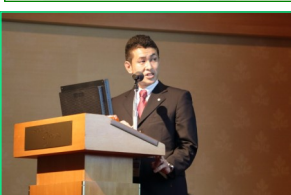
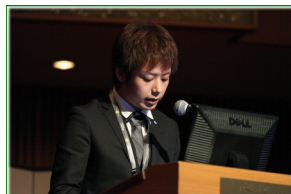
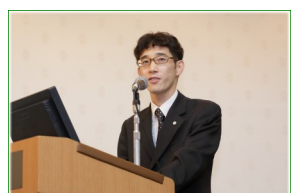
大西脳神経外科病院 理事 埜本 勝司



2015年は大西脳神経外科病院にとって開設以来最もエポックメイキングな年であったように思います。それは、第18回日本臨床脳神経外科学会という全国学会と、第4回ネパール-日本脳神経外科学会という国際学会を主催したからに他なりません。1年に2回も大きな会をお世話することはかなり大変なことで、特に臨床脳神経外科学会は、個人病院が主催する全国学会としては最も大きな会ですし、準備期間を含めると丸2年間様々な苦労がありました。大西院長はその重責を背負って職員の協力と積極的参加を早くから呼びかけ結束して準備にかかられましたし、実行部隊も細かな日程を繰り返し検討しながら対外的な交渉を進めていきました。2015年に入ってからには困難な日程調整や次々に生じる問題をクリアしながら開催の7月を迎えたわけですが、最も心配していた天候が大型台風の直撃という最悪のシナリオに変わり、参加者のキャンセルや会員懇親会として神戸らしさをアピールしたクルージングができるかどうかの瀬戸際に立たされました。然し天の思し召しか、交通機関の乱れはあったものの奇跡的な天候の回復で、参加者のキャンセルも殆どなく、学術発表も遅滞なく進行し、待望の神戸-明石海峡クルージングの懇親会も無事終了することができました。多くの参加者から労いの言葉を戴き、会の運営にも高い評価を戴いたことは主催した病院にとって最大の喜びであります。

脳外科の臨床に携わっている全ての部門の人たちが一堂に会して日頃の成果を発表し合い、情報交換し、親交を暖められたことの素晴らしさを実感した学会でもありました。

10月末から11月の初めにかけて行われたネパール-日本脳神経外科学会は、第3回のネパール脳神経外科学会と合同で、首都カトマンズにおいて3日間にわたって行われました。現地での学会準備は当院と交流の深いアンナプルナ脳神経外科病院のDr.Pant以下スタッフが引き受けてくれましたが、院長の呼びかけで日本からこれまで最多の46名の日本人脳外科医が参加し、盛会裏に終えることができました。Workshopでは日本の最先端技術を現地の若い脳外科医に指導し、会の終了後は地方都市に出かけて、震災後の医療に多少ともお手伝いできて国際支援を果たせたことも意義深かったと感じています。滅多にない二つの機会に主催者の一員として参加できた事を大変幸せに思っております。ご協力戴いた多くの皆様に心から感謝いたします。



真剣な眼差しで発表です

第18回日本臨床脳神経外科学会を終えて

看護部長 上原 かおる



当学会には第10回から参加していますが、今回、大西院長が会長を務めることになり、実行委員として企画段階から運営

に参画しました。プログラムを考えるにあたっては、テーマが「近未来の臨床脳神経外科のゆくえ」と決定され、現在のトピックスや動向を加味したシンポジウムのテーマを考えました。看護においては、脳卒中リハビリテーション看護が認定されてから5年を迎えたため「認定看護師への期待と今後の役割」と専門分野での教育を考える「脳神経外科における看護教育」の2テーマとしました。教育講演では、やりがいを持って働き続けられるような取り組みをされておられる立場から、「楽しく働くために～ナースのモチベーションアップの視点から～」を、脳神経専門看護師の養成に携わっておられる立場から、「日本における脳神経看護の明日に向けて」の講演をお願いしました。また、一般演題にはたくさんの応募を頂きました。やむを得ず、ポスター発表に変更して頂いた方もあり申し訳なく思います。今回は、テーマの内容が多岐にわたったため、カテゴリーを増やしてプログラムしました。

学会中は、サブ責任者として受付け周辺を担

当し、お越しになられた参加者の皆さまがスムーズに受付等が済ませることができるよう努めました。導線が悪く、迷っている方が多かったため、設置場所の変更をコンベンション会社を通じてホテル側に申し入れたのですが、セキュリティ上変更は叶いませんでした。ご不便をお掛けしたことを申し訳なく思います。その他に関しては、担当者全員で協力し合いスムーズに運営することができました。

そして何より気にかかっていたのが天候でした。学会前に台風が接近していたため開催が危ぶまれましたが、無事開催することができてほっとしています。しかしながら、台風の影響によるJR運休や車の大渋滞のため、スタッフが時間通り到着できないという事態が発生しました。皆、それらのことも予測して行動していたのですが、想定以上の状況が起きてしまいました。でも、そこはさすが「チーム大西」。それぞれの担当所でカバーし合って、運営に影響を及ぼすことはありませんでした。ただ、参加者の皆さまにはたいへんご不便をお掛けしたと思います。初日（18日）の午前中は参加者が少なかったのですが、その後たくさんの方々に参加して頂き感謝しております。

学会前日の会長招宴会から始まり、学会、クルーズと全ての行程を無事終えることができました。当院のチーム力を改めて感じる事ができました。学会を現場で支えた人、臨床の現場で支えた人、それぞれの役割を果たして頂きありがとうございました。本当にお疲れ様でした。



各自の演題発表や座長を行い、各会場の運営にも関わり大忙しの二日間でした



「学会を終えて」 事務部長 藤井 健



全てが今学会のための経験だったと言えるほど、当院の持てる力を結集できた学会となりました。

思えば、私の入職間もない‘09年4月に、大西院長からの最初の指示により第58回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会を覗いたことが、自身にとっての“今学会”の始まりでした。

‘10年1月の、ハワイでの第6回PPNC (Pan-pacific Neurosurgery Congress) への参加は、当院主催の第7回に向けた布石となり、その直後の4月に大西院長が会長である第59回近畿支部学術集会が開催され、成功裏に終了しました。同年7月には釧路での病院脳神経外科学会にて10演題を発表、総勢19名で参加しました。以降‘11年の松山で12演題、参加21名、12年函館は12演題、24名が参加しました。

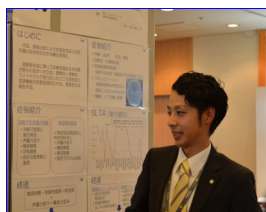
‘13年1月には、ハワイ島での第7回PPNCを北海道大学脳神経外科と共催し、同年7月福山での病院脳神経外科学会に13演題、27名で参加しました。

一方、今学会の会場となったホテルの選定作業は開催より3年前の‘12年8月より始まり、

‘13年5月に4つの候補ホテルによるコンペを実施、同年6月にホテルオークラに決定しました。‘13年9月には懇親会場となったルミナス神戸の貸切予約を完了、その後、コンベンション会社の選定が始まり、同年10月に2社によるコンペを行い、12月下旬にJTBコミュニケーションズに決定しました。コンベンション会社との初回の打合せは‘14年1月16日、院内の第1回の準備委員会は同年1月30日に開催されました。以降、JTBCOMとの打合せは最低月1回のペースで開かれました。

‘14年7月の東京国際フォーラムでの臨床脳神経外科学会では、これまでで最も多い19演題を発表し、翌年に迫った同学会主催に備えて40名と大挙しての参加となりました。

こうした経験を経て今学会に臨み、測ったように襲来した台風に振り回されながらも千名を超える方々にご参加いただきました。当院からの発表は23演題、参加スタッフ数は延べ212名と、文字通り当院の総力を挙げて、会の運営に当りました。その結果、各方面よりご好評をいただいたことは、私たち職員にとっても大きな喜びであると共に、自信にもなったことと思います。この自信を胸に、今後とも部門を越えた協力を一層深めて、迫りくる医療界の荒波を乗り越えて参りましょう。



「喜んでいただくために」

医事課長兼事務次長 瀧原 健司



数年前、学会の事務局を当院が担うとことを初めて聞き、その後準備委員会が立ち上がり、全プログラムを終えるまでの間というのは、今振り返るとあっという間でありました。私は準備委員会メンバーとして主に事務局である裏方を担当し、その中でも当学会初のナイトクルーズ懇親会を発案した大西院長のルミナス神戸2に賭ける想いというもの、多くを語らずとも事前より全スタッフにその意志が伝わってきていました。

スタッフの中には過去にプライベートで乗船した良き思い出を思い起こしながらも、懇親会成功のために気持ちを引き締めて臨んだスタッフもお

られたのではないのでしょうか。

当日、予測を超える人気となったナイトクルーズ懇親会ですが、重なる台風の合間の出航であったことが大きく影響し、事前打ち合わせで追加発注が可能となっていた様々な料理も、追加発注分の食材調達が困難となっておりました。料理長と押し問答の末、船内冷蔵庫等を確認してもらい、可能な限りの追加料理メニューの調整を行ったことも、大イベントならではのあったように思います。様々な予期せず事態にも対応できる準備の大切さを改めて感じ、今後の業務にも活かしていきたいと考えます。



撮影を通して得た経験

放射線科 技師長 佐藤 直隆

2015年7月ホテルオークラ神戸にて、第18回日本臨床脳神経外科学会が開催されました。

当院が開催病院ということで、何としても大成功させるべく長い準備期間を経て当日を迎えました。私個人としては座長、放射線部会の幹事、D会場（主に放射線系）の会場責任者等役割を担っていましたが、その中でも最も時間を費やした、学会の記録という面での写真・動画撮影について今回振り返りたいと思います。

主な撮影場所はA会場からG会場の7会場、ほかにポスター会場、受付等であり、そのすべてを記録に残すということで、人員も器材もともに多く必要となり困難が予想されました。今回写真・動画記録係にあてた人員は約10名でしたが、その個人それぞれは別の役割を多く抱えた中での活動となりました。

学会当日は個人それぞれが普段から使い慣れているカメラを持ち込み、自分の担当する場所での写真撮影・動画

記録を行い、撮影者が発表時は代役を立

てるなどそれぞれが責任を持って活動し、単に写真・動画を撮るということではなく「記録を残すと」という事に重点を置き撮影を行いました。青空の下光量が十分にある撮影とは違い、講演中の薄暗い中ではシャッタースピードが長くなり思うような写真が撮れず、後に確認すると手ぶれして使い物にならない削除画像の数々。それでも最終的には4,000枚近い画像が記録として残りました。会長招宴を含め1日目、2日目と大変ではありましたが、あっという間に過ぎ去った3日間であり素晴らしい経験ができました。

最後に私自身が最も印象に残っている写真は、学会終了時に撮影した職員全員の集合写真です。



日本臨床脳神経外科学会に参加して

副院長兼統括看護部長 黒木 みちる



脳神経外科看護の発展と実践力の向上において、学会での発表は重要なことです。第18回日本臨床脳神経外科学会は当院主催で開催され、看護部からは7題発表することができました。口演発表は以下の4題でした。

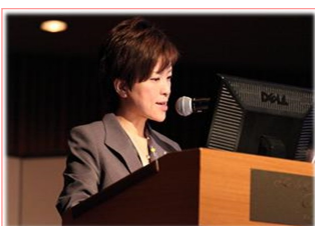
「術中MR I撮影時の準備・移動時間短縮への取り組み」手術室、「タイムリーで的確なピクトグラム表示から得られた効果」北2階病棟、「脳卒中患者に対するせん妄予防のアプローチ—環境調整によるせん妄発生率低下を目指した取り組み—」南3階病棟・SCU、「脳血管造影検査のオリエンテーションの充実に向けて—院内研修を通して外来看護の在り方を考える—」外来。また、ポスター発表は以下の3題でした。

「剃毛が及ぼすボディイメージの変容と退院後のQOLの変化—患者アンケート調査を通して—」南4階病棟、「脳卒中患者における排尿障害出現についての調査」南3階病棟、「介護福祉士における情報共有用紙の作成と効果」看護部。

発表者からは、学会発表が初めてであり良い経験となった、効果的なプレゼンテーションをどのようにすればよいかを学ぶ機会となった、という報告がありました。次への課題としては、看護実践力の向上にむけて、日々の実践から脳外科看護の専門性が報告できる看護チームへと成長していきたいと思えます。

教育講演の徳島大学大学院教授 田村綾子先生の講演では、看護基礎教育で脳神経外科看護を系統立てて教えられてこなかった現状の振り返りから、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の活躍の紹介や脳神経専門看護師の養成に向けての取り組み等、脳外科看護における将来展望の内容でした。また、飯塚病院副院長兼看護部長 須藤久美子先生の講演では、ナースのモチベーションアップの視点から、自分が提供したサービスで他者に喜んでもらったとき、自分が成長したと実感できたとき、本質に触れた時に着目して看護活動を行い、さらに楽しく働くためにはナースのモチベーションを上げる取り組みが効率的であることを報告されました。脳神経外科看護が楽しいと言えるチームづくりのために、前向きに取り組んでいくために必要なパワーをいただいた講演でした。

第19回は埼玉県熊谷市で開催されます。看護の質向上を目指した看護活動を、今年度の学会でも発表していきたいと思えます。



「思いを伝えるために」

医療技術部副部長 理学療法士 吉野 孝広



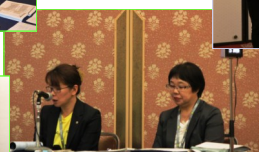
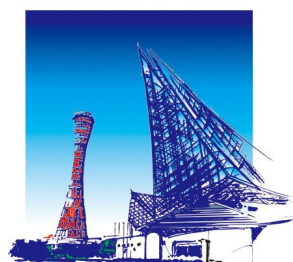
今回の第18回臨床脳神経外科学会で私は3つの大きな仕事を任せて頂きました。1つめはリハビリテーションに関わる特別講演のマネージメントでした。幾度とおこなわれた会議の中で「リハビリテーションに関わる現状とこれから」という題で誰に講演をしてほしいのか、自分が聞きたいと思う講師は誰か、という発想で自分なりに考えました。最終的には特別講演ではなくシンポジウムという形となり、日本理

療士協会会長である半田一登先生、聖隷クリストファー大学大学院リハビリテーション科学研究科長、宮前珠子先生、関節ファシリテーション学会理事長、JM研究所所長である宇都宮初夫先生の3名をお迎えし各先生方から貴重なお話を聞くことができました。

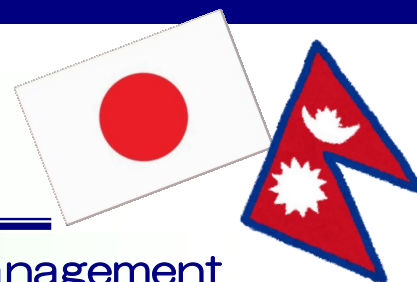
2つめは肺理学療法モーニングセミナーを行わせて頂いたことです。私自身が人に伝えられる技術を持っているとは思っていませんので他に適任者がいるのではないかと考えたのですが、機会を与えて頂いたのだから自分なりにこれから始める方にもわかりやすく呼吸介助技術が伝えられれば

と思い発表しました。朝早くからのセミナーにもかかわらず多くの方々にご来場いただき感謝しています。3つ目はシンポジストとして発表をさせて頂いたことです。脳神経外科領域におけるチーム医療の現状と問題点と題しシンポジウムが行われ、この席で私はリハビリテーションを通してチーム医療の重要性を述べさせて頂きました。開院当初から脳卒中患者の呼吸管理については院長から多くの助言をいただき医師、看護師との連携を進めてきました。決して流暢な発表ではなかったと思いますが私の思いは伝えられたのではないかと考えています。

1つの学会でこれだけの経験をさせて頂いたことを大変うれしく思い、ご協力いただいたスタッフの皆様へ感謝したいと思います。



3rd NESON and 4th NJNC Combined Meeting



Brain Attack: Prevention and Management



第4回ネパール日本脳神経外科学会をネパールで開催できますことは、私ども病院職員にとりまして、大変うれしく光栄に思っております。

ネパールと日本の両国から脳神経外科医が集い、日々直面する臨床について話し合うことは、医療の知識や技術の向上に寄与だけでなく、両国脳外科医の友情を築く、とても良い機会となることと思います。

学会のテーマは「ブレインアタック予防と治療」であります。第二次世界大戦後、日本の脳卒中治療は劇的な進歩を遂げてきました。脳卒中予防の知識は脳卒中治療の進歩と共に広がってきました。日本における脳卒中患者の死亡率はトップでありましたが、現在はがん、心臓病、肺炎に次いで第4番目となりました。ネパールでは脳卒中予防の知識と治療に関して、

日本のような進歩がまだなされていません。そのため、この学会では我々の経験に基づいた知識と技術をネパールに広める事により、我々にとりましても過去を振り返ることで将来の展望をさらに広げることができ、両国にとって貴重な機会になると確信しています。

学会は2015年10月30～31日、11月1日、ネパールの首都カトマンズで開催されます。しかし悲しい事に、今年4月25日ネパール大地震が発生しました。1万人近い死亡者と、その数百倍の被災者がいると報告されています。今回学会開催と同時に、当地にて災害救助活動も予定しています。

この学会を通して、脳神経外科のさらなる発展のために、両国の脳神経外科医が友情と信頼を築く機会となることを心より願っております。



「初めての国際学会」

脳神経外科医師 前岡 良輔

2015年10月30日～11月1日にネパールで開催された国際学会のThe 3rd NESON and 4th NJNC combined meeting に参加しました。ネパールでは2015年4月25日(現地時間)に M7.8の大地震が発生したばかりであり、震災後6ヶ月



しか経過しておらず、街は復興の最中でした。また私自身は海外渡航歴がなく、ましてや国際学会に参加することなどとてもないことでした。さらに震災後間もない国、さらにはそこで開かれる学会ということもあり、その全てが驚

きの連続でした。

まずは学会発表ですが、当然英語での口頭発表であり、作成から原稿・発表まで英語で行いました。冷や汗の連続ではあったものなんとか乗り越えることができました。英語での発表、英語を用いての異文化コミュニケーションを経て、いつの間にか英語は学ばなければいけないものから、学びたいものに自然と変わっていました。そして痛感したことは自分のしてきた診療、勉強などは英語で発表して初めて世界に認められるということ、それを行わなければ全く何もしていないのと変わりが無いということでした。

また、学会の空き時間を利用して震災後間もないネパールの街を散策しました。私自身は

1995年1月17日に起きた阪神大震災は実家の奈良県で被災しました。奈良県は、被害はそれほど大きくはなく、震災当時は日夜を問わずメディアを通じて流れる被害の大きい地域であった神戸などの画像(特に阪神高速道路が倒れていた画像)に衝撃を受けたのを今でも鮮明に覚えています。当時は小学生であり現地に赴くこともできませんでした。

ネパールでは震災より半年しか経過していないこともあり、街では倒れたままの建物、整理されず山積みされたままの瓦礫であふれ、倒れてしまい跡形もない世界遺産、補修中の世界遺

産なども衝撃的でした。先進国にも数えられる日本ですら、東日本大震災から5年が経った今でも復興しきれていないことよりもこれからも国際的な協力が必要だと痛感しました。

学会を通じて、将来的には英語を用いて日本の医療技術の普及、またサポートにすることで世界の数多くの患者さんの救いになれるようになりたいと感じました。



「15年ぶりのネパール」

事務部 参与 森脇 士郎

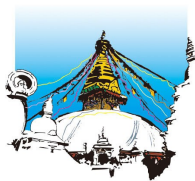
15年ぶりにネパールを訪れる機会を得た。当院院長が会長をされた学会がネパールの首都カトマンズで行われたからである。第4回ネパール・日本脳神経外科学会がそれである。ネパール側の会長はアンナプルナ病院の院長バサント・パント医師が務めた。大西院長や私にとって、パント医師は30年来の友人関係でもある。前回15年前に訪れた時は、パント医師が広島大学の医学博士の学位を取ってネパールに帰国し、ネパール国内での脳神経外科領域を広めるために、悪戦苦闘、大変な努力をしている頃であった。務めていたカトマンズモデルホスピタルの手術室を見学したが、こんなところで脳外科の手術をしているのかと、びっくりするくらい、設備、環境、全てが時代遅れであった。当時、ネパールはまだアジアの最貧国で、何もかもが他国からの援助頼みで、特に医療の中でも脳外科が一番遅れていた分野の一つであった。パント医師の苦勞は大変なものであったろうと容易に推測できる。当時のカトマンズは、唯一の国際空港のカトマンズ空港から市内中心部への道は、舗装されておらず、牛がのんびり道路の真ん中を歩いているような状況であった。町の中も舗装されているところは限られており、土ぼこりが立ち昇っていた。少し路地に入ると、猫や犬の死骸がそのままにされていたのを思い出す。

ネパールはヒマラヤの国である。カトマンズ

からでも郊外の高い丘に登れば、遠くに雪を頂いたヒマラヤを見ることができる。観光立国ネパールが去年4月に大きな地震に見舞われ、今回の学会も開催が危ぶまれたが、大西会長、パント医師の熱い思いで開催された。日本からも50人もの脳神経外科の医師が参加された。他にインド、パキスタン、ブータンなどの国からも若い医師が参加され国際色豊かな学会になった。今学会において、ホスト国のパント医師のご尽力のおかげで、大変盛り上がった。そして医療後進国のネパール、インド、パキスタン、ブータンの若い医師達にとっても、今の最先端の知識を持った日本のドクターの発表や、顕微鏡や血管内手術の器具を使ったワークショップなど大いに意味のある学会となった。

パント医師がホストとしてこんなに立派な学会を開かれるまでになったこと、ネパール医学界での確固たる地位を築かれていたことに尊敬の念を抱いた。今のネパールは、道路は舗装され、車は多く15年前と比べるべくもない。当時ビールは、フィリピン製のサンミゲルというビールしかなかったが、今はネパール自前のおいしいビールが何種類もできていた。私の一押しはエベレストビールである。今回、大地震の跡も少しあったが、発展したネパールを感じられて大変うれしく感じた次第である。





「ネパール探訪記」

副院長 兒玉 裕司



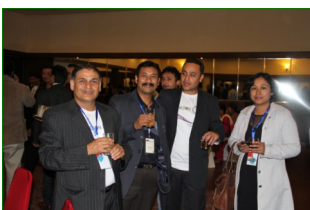
昨年10-11月に第3回NESON（ネパール脳神経外科学会）と第4回NJNC（ネパール・日本脳神経外科学会）の合同学会に参加致しました。現在、当院に研修のため2人のネパール人医師が来日していることもあり、初ネパールでありながら何となく親近感を持ちつつ、また震災の影響に多少の不安を抱えながらの訪問でした。



高い標高のわりには寒くないと聞いていましたが、確かに日中は明石と大差ない気温です。夜は冷えますが、電力が足りないらしく、じっと待ってもホテルの暖房は冷たい風しか出ませんでした。街に出ると、無数の束ねられた電線が手で触れられる位置で電柱の間にぶら下がり、そこから我が家に電線を（勝手に）引き込みながら傾いた家を数本の角材で支えたまま生活している様子は、なかなかの非日常でした。ガソリンスタンドから始まる置き去りにされた長蛇の車の列は、震災ではなく政治トラブルによるインドからの供給ストップが原因だったそうです。そのおかげで、屋根に多くの客を乗せたバスという、テレビに映る光景を見ることができました。そんな中にも3T-MRIを備えたきれいなクリニックがあったりするアンバランスは、ありがたいですが、この国のうまくいっていない部分のような気がします。しかし最も印象的だったのは、失礼ながらアジア最貧国と言われる震災直後の国にかかわらず、一見してわかるような悲壮感が見受けられなかったところです。町中ではホームレスらしき人もほとんどおらず、スリにもあわず、治安はむしろいいというイメージでした。首都カトマンズをほんの一部知っただけなので勘違いかもしれませんが・・・。



学会は、こじんまりとしたアットホームな雰囲気で行われました。国際学会経験の少ない者にとっては参加しやすい良いステップとなったように思います。我々にとっても、一国の脳神経外科医療の発展に貢献できる機会があるということは素晴らしいことだと感じた次第です。



“ Experience on two consecutive great scientific meeting”

Dr. Gurung Pritam

It was a great and successful scientific meeting of 18th JANC ,kobe and 3rd NESON and 4th NJNC combined meeting, Kathmandu under the presidency of Dr Hideyuki Ohnishi which was held last year. It was the great platform to learn from senior faculty. In the Kobe meeting, we also raised some fund for earthquake victims of Nepal which hit severely last year in April. I am really very grateful to whole Ohnishi Neurological Center team for this social activities. On the other hand, 4th NJNC meeting with theme on Brain attack: Prevention and management and hands on anastomosis, endovascular and endoscopic spinal surgery was very fruitful. One day health camp at B& C hospital, Jhapa and followed by fikkal tour was very memorable after meeting.

「ネパール学会を振り返って」

脳神経外科医 高橋 賢吉



2015年10月30日から11月1日の3日間、NESON（第3回ネパール脳神経外科学会）とNJNC（第4回ネパール・日本脳神経外科学会）の合同学会がネパールの首都カトマンズで開催され、学会での発表及び血管内治療ワークショップの講師として参加させて頂きました。同年4月に発生したM7.8のネパール大地震の影響やそれに伴う石油危機により開催が危ぶまれた時期もあり、出発前には現地の状況に不安を抱いておりました。

開催2日前の10月28日にワークショップ用の血管内治療機材を満載したスーツケースをもって日本を出発し、タイのバンコク空港経由で翌29日にカトマンズに到着しました。空港からバスで30分程度のアンナプルナホテルに宿泊し、同ホテル内で学会も開催されました。ところどころに地震により倒壊した建物はありましたが町には活気があり、発展途上国ならではの混沌とした街の雰囲気は印象的でしたが、一歩ホテルに入ればシャワーの水が濁っていることを除けば非常に快適で何不自由なく過ごすことができました。学会には総人数194名、日本からも46名の多数の参加者があり、特に発展途上であるネパールの脳神経外科の発展に寄与する有意義なものであったと思います。ワークショップでは顕微鏡を使用した血管吻合・内視鏡下の脊髄外科手術・脳血管内治療に関して実際の治療機材を持ち込んで技術指導が行われました。私が担当した脳血管内治療では、脳血管閉塞に対する血栓回収療法、頸動脈狭窄症に対するステント留置術、脳動脈瘤に対するコイル塞栓術の3部門を実際に治療に使用するステント、カテーテル、コイル等を多数用いてネパールの若い脳神経外科医と一緒に勉強しました。



特に脳血管内治療はネパールではほとんど行われていないため、非常に興味を持って取り組んで頂き有意義であったと思います。学会終了後の1日間は自由時間を設けて頂きましたので、標高2100mのナガル

コットの丘から雄大なヒマラヤ山脈を眺めたり、カトマンズ市内の王宮の史跡であるダルバール広場等も観光することができいい経験となりました。行きは不安もあって憂鬱なフライトでしたが、帰りは飛行機からエベレストを含むヒマラヤ山脈を眺めながら心地よい旅情にひたり帰国することができ、いい学会であったと思います。



学会開催後に皆さんと集合写真です。

「昨年を振り返って」

医局秘書 石川 真優子

生まれて初めて学会という物に参加したのは2014年7月19日。東京で行われた「第17回日本臨床脳神経外科学会」でした。当院から約40名が一同に新幹線に乗り込み、出張とはいえ、なんだか朗らかな雰囲気にもまれていたことを覚えています。この段階では、1年後そして1年3か月後に待ち受けている2つの学会がいかに大きなもので、当院の担う使命がどれ程重い物なのか、全く想像をしていませんでした。

その後、夏が終わる頃でしょうか。日々頭を抱えながら構想を練る院長の姿を近くで拝見し、「これはただ事ではないぞ」とジワジワ気付き始めました。私には何が出来るかを考えても、自分のポジションをしっかりと理解出来ておらず、常にもどかしさを感じていました。神戸の第18回日本臨床脳神経外科学会当日の細かい記憶は、余り残っていないのが正直なところです。ただただ厳かな空気に圧倒されながらも、滞りなく閉会式を迎えられるように祈っていたことは確かかと思えます。

そして、神戸の学会の「閉会の辞」と同時に、第4回ネパール・日本脳神経外科学会準備開始のゴングが鳴りました。大きな学会を経験した直後とはいえ、今度は「国際学会」です。運営会社さんも、いません。自分たち自身で協賛企業を募り、ご参加頂ける先生方にお声を掛け、現地スタッフと毎日何度も連絡を取りながら準備を進める行程は、なかなかハードなものでした。中でも、英語で自分のニュアンスを伝えることの難しさ、そしてネパールの方々との



大西にはなくてはならない存在です

文化の違いには苦戦を強いられました。現地の秘書さんには「日本人とは、本当に細かい事を言う、面倒な人種だな」という印象に映った事でしょう。

ネパールの学会は、至らない点は多々ありつつも自分なりに全力で取り掛かったと言える程、魂を注ぎ込みました。私がやらないで、誰がやる？というプレッシャーを、勝手に一人で背負っていたのだと思います。もちろん、他の事務局員や現地のスタッフ、そして快く参加を決めて下さった先生方あってこそその学会です。今思い出しても、その一体感には目頭が熱くなります。

2015年の学会YEARを終えて、様々な出会い、経験、感情のぶつかり合いがあったなと、濃い内容の月日を懐かしく思います。当院がもし学会の事務局を再びすることとなった場合、私は「是非携わらせて下さい！！」と、間違いなく挙手することと思います。その声を採用して頂けるかは、別の問題ですが…。

編集後記

春の日差しも少しずつ強さを増し、今年の夏も暑いかなと、昨年のことを思い返す今日この頃です。今回の「ぶれいん」は学会特別号と題し昨年行われた2つの学会を特集しました。学会に対する思いばかりが強く、遅々として進まない編集で、ずいぶん遅い発行になりましたが、これまでにない大作となりました。ページ数だけでも倍以上、写真の数も最多となりました。枚数が多く、一通り見るだけでも大変で選定には本当に苦労しました。しかしそれだ

け学会が盛大にそして参加者全員の強い思いで行われた証です。一人でも多くの方を載せようとレイアウトにはとても気を使いました。

今年も新入職員を迎え平成28年度がスタートしました。今後「ぶれいん」の編集で皆様にご協力いただくことがあると思います。その時はよろしくお願いいたします。そしてお忙しい中今回の発行に際し原稿をいただいた職員の皆様、本当にありがとうございました。 吉野

